13、Duchenne 型ＰＭＤ者のボディ・イメージ ―数値分配法による四肢に対するイメージの評価

国立療養所鈴鹿病院
片山幾代　野尻久雄
宮崎光弘　河野慶三

ボディ・イメージを測定する方法は、ＳＤ法、人物画法、樹木画法等があるが、今回は、四肢のイメージに限定し、四肢の機能、形態を示す言葉を用いた数値分配法により Duchenne 型ＰＭＤ患者が、四肢についてどのようなイメージをもっているかを調査した。

〔対象と方法〕

対象は、当院に入院中の Duchenne 型ＰＭＤ男子、歩行不能者（年令13〜27歳）50例である。

問題は、数値分配法に従って、「あなたの足にとって何がたいせつだと思いますか。たいせつだと思うものを５つ選んで○をつけなさい。○をつけたものが全部で 100 点になることにして、たいせつさに応じて点数を与えなさい」とした（表１）。四肢という術語は、日常的な手、足という言葉におきかえた。

（表１）

あなたの足にとっては、なにがたいせつだと思いますか。たいせつだと思うものを、５つえらんで○をつけてください。○をつけたものが全部で100点になることにしてたいせつさに応じて点数を与えなさい。 ながい（　　） ちいさい（　　） おもい（　　） あるく（　　） とぶ（　　） はやい（　　） おおきい（　　） ける（　　） はしる（　　） おそい（　　） ほそい（　　） みじかい（　　） ふとい（　　） かるい（　　） すわる（　　） たつ（　　）	あなたの手にとっては、なにがたいせつだと思いますか。たいせつだと思うものを、５つえらんで○をつけてください。○をつけたものが全部で100点になることにしてたいせつさに応じて点数を与えなさい。 ちいさい（　　） ながい（　　） たたく（　　） ほそい（　　） もつ（　　） おもい（　　） おおきい（　　） さわる（　　） ふとい（　　） にぎる（　　） みじかい（　　） ひろげる（　　） かるい（　　）

言葉については、足は、歩く、とぶなど機能を示す言葉、ながい、ちいさいなど形態を示す言葉それぞれ8項目ずつ計16項目、手は、たたく、もつなど機能を示す言葉5項目、ながい、おおきいなど形態を示す言葉8項目計13項目をランダムに並べた。

〔結　　果〕

50例に実施したが、選択項目数過多及び不足2例、配点不能1例、配点ミス7例計10例は集計の対象としなかった。

障害度別では、障害度5－6が16例、障害度7－8が24例であった。

足についての選択項目、平均評価得点上位、5位までを表2に示した。選択項目は、両障害度とも「歩く」が1位を占め、選択者の80%近くが選んでいた。平均評価得点でも、同様に「歩く」が1位で30点近くの配点をしていた。形態を示す言葉は、両障害度とも「ながい」だけで、機能を主体に選んでおり、障害の進行した群にそれが顕著にあらわれている。

（表2）　　足

選択項目				平均評価得点			
stage 5～6		%	stage 7～8		%	stage 5～6		stage 7～8	
あるく	12	(75.0)	あるく	12	(87.5)	あるく	26.3	あるく	27.9
ながい	11	(68.8)	た　つ	19	(79.2)	た　つ	11.9	た　つ	16.0
はしる	10	(62.5)	はしる	17	(70.8)	はしる	10.8	はしる	12.7
た　つ	8	(50.0)	すわる	14	(58.3)	ながい	10.8	すわる	11.2
すわる はやい	7	(43.8)	ながい	11	(45.8)	すわる	8.1	ながい	8.7

（― は形態を示すことば）

手についての選択項目、平均評価得点1位～5位までを表3に示した。手も足と同様に障害が進行した群に、形態よりも機能を主体とした選択を行なう傾向がみられた。平均評価得点をみても、障害度5－6では、2.3位に「ながい」、「おおきい」という形態を示す言葉がでてくるのに対して、障害度7－8は1位～5位まで全部機能を示す言葉で占められていた。

（表3）　　手

選択項目						平均評価得点			
stage 5～6		%	stage 7～8		%	stage 5～6		stage 7～8	
も　つ	15	(93.8)	にぎる	22	(91.7)	も　つ	28.3	にぎる	23.2
ながい	12	(75.0)	も　つ	22	(91.7)	ながい	17.0	も　つ	22.6
にぎる	9	(56.3)	ひろげる	19	(79.2)	おおきい	10.6	ひろげる	13.9
ひろげる	9	(56.3)	たたく	15	(62.5)	にぎる	10.3	さわる	11.7
おおきい たたく	8	(50.0)	ながい	9	(37.5)	たたく	8.1	たたく	11.5

（― は形態を示すことば）

〔考　　察〕

数値分配法（constantsummethod）とは、ある刺激がもつ諸特性の程度に応じて100点の点数を適宜分配させるものである。したがって、刺激に対する主観的印象を直接数値で表現できる技法であり、刺激についての主要な特性を順位づけて浮かびあがらせることができる特徴がある。

Duchenne型ＰＭＤ歩行不能者の四肢のイメージをまとめてみると、手、足ともに形態よりも機能を主体として選択、配分していることがわかった。その傾向は、障害が進行した群に顕著にあらわれていた。この事実に対しての説明は、この調査だけでは困難であり、今後、同年令の健常者を対象に調査し、比較検討を行ないたいと考えている。

今回のこの研究は、ＰＭＤ患者のボディ・イメージの研究の手はじめとして行なったものである。

14. 要求水準検査法による Duchenne 型 Ｐ・Ｍ・Ｄ者の行動特性
― 言語性検査と動作性検査との比較 ―

国立療養所鈴鹿病院
野尻久雄　宮崎光弘
片山幾代　河野慶三

ＰＭＤ患者の行動特性を要求水準測定法により検討するに際し、我々は、彼らの身体的ハンディ・キャップをとり除くために言語に限定した方法を用いてきたが、以前に行なったＰＭＤ患者のＷＩＳＣの結果が、言語性よりも動作性優位であったので、この傾向が要求水準というＷＩＳＣとは異なった測定方法を用いた場合にもみられるかどうかを知るために、要求水準検査を言語性と動作性にわけて同一被験者を対象として比較検討した。

〔対象と方法〕

対象は、当院入院中の Duchenne型Ｐ・Ｍ・Ｄ男子21例（年令13～22歳、障害度１－８）で、そのうち中学生９名、高校生以上12名である。

言語性検査は、既に報告したカタカナの５文字毎の逆唱、動作性検査は、図１の星形図形を trace させる方法を用いた。動作性検査の作業量は、星形を構成するとなりあう二辺を trace し

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

ボディ・イメージを測定する方法は、SD 法、人物画法、樹木画法等があるが、今回は、四肢のイメージに限定し、四肢の機能、形態を示す言葉を用いた数値分配法により Duchenne 型 PMD 患者が、四肢についてどのようなイメージをもっているかを調査した。